

平地湖面の三者近く相接す。かゝる土地の住民が生活形態はいかに地形と關係するや又藩治時代一村にして六藩に分轄されたるが如き複雑なる行政上の分離關係はいかに事實上の隣係關係と交錯し影響せしや等種々興味ある問題は本書によりてその解決を求むる事容易なり。而もこれらの問題は又日本國民が過去に於ける生活様式の類型を示すものとして單に本郡の問題たるに止まらざるべきなり。(菊版一、一三一頁、非賣品、印刷實費一〇・〇〇、滋賀縣高島郡教育會發行)(肥後)

## ● 飛驒史料 維新前後之一

岡村 利平編

本書は編者が選史備用の爲め飛驒國に關する太古より明治に至る史料を集めたるもの、内、元治元年正月より明治元年六月中旬に至るまでの部分を印刷に附したもので、編次の體裁は『大日本史料』に倣ひ、事を以て次第に日月年に係け、每條の首に綱文を置き次に史料原文を列載せるものである。編者は愛郷の念強く、四十年來熱心

に飛驒史料を蒐集研究しつゝある上で、隨つて本書所載の史料は多方面に亘り可なり豊富であつて、明治維新前後に於ける此國の狀況を知らんごする者は本書に依つて多大の便益を受けるこゝか出来る。但し聊か氣附いた點を云へば、史料として舉げられたもの、中に雜誌の記述或は年表を其儘引載してあるこゝで、例へば明治元年正月九日條及び四月十八日條の『歴史地理』、三月九日條の『明治大年表』の如きがそれで、是れ等を強ひて引載せんごならば参照の部に入れた方がよからう。又明治元年五月二十四日田安家達をして徳川宗家を繼がしめ、是日駿河府中に封する條の史料として『明治大年表』だけを擧げてあるのは其事が直接飛驒國に關係がない故かも知れぬが、綱文を立てる以上は、やはり太政官日誌其他もつゞ確實なものを引載された方がよからう。それらは兎に角吾人は斯くの如き多數の史料を蒐集編次された編者の努力に對しては十分の敬意を表し、第二以下諸編の續刊を切望する。(菊版八〇六頁、飛驒史談會刊行、價七・〇〇)

● 大典 禪師 小島 文鼎著

禪師の偉才高識を慕ひつゝある著者が、十年の久しき間禪師に關する研究の結晶が本書である。禪師は徳川中期に出でたる緇林の文豪で、五山碩學としては朝鮮修文職に任じ、且つ屢幕議に參與して議聘の事等に軼掌した人であつて、其の詩文は一世を聳動し、就中最も散文に長じた。其の事蹟の内、清國に於て當時湮滅してゐる佛典並に日本選述に係る佛典祖錄等一百餘部七百餘卷を彼國の名刹に寄贈せんとした如き、或は古來我國の漢學者が往々我が人名地名を支那式に書き變へて得意せざるを妄の甚しきものゝ難じ、或は自ら古文辭學派の系統を汲み徂徠の偉材を敬慕せるに拘はらず其の學説には反對であり、孟子をはじめ宋儒等の學説をも往々駁撃した如きは禪師の偉大さを示すものである。本書は是等禪師の事蹟につきて委曲を盡くしよく其の眞面目を發揮してある當時の禪界及び漢文學の狀況を知らんとする士の必ず座右に備ふべき良書である。(四六版四四二頁、大阪福田

宏一發行價三・〇〇)

● 日本古典研究 植木直一郎著

古典を稱せらるべきもの、可なり多數ある中本書は主として記紀の二典を中心として研究し、之に關係ある點に於て他の諸書にも言及したものである。其の内容は第一章に古典の範圍、第二章に古典研究の二方面として内容及び外形の研究に就て述べ、第三章は記憶傳誦の時代を記録文書の時代、第四章は傳誦より記録へ、第五章は記録撰修の起原、第六章は古事記の撰修、第七章は日本書紀の撰修、第八章は神代記としての記紀二典の地位第九章は異本の發生を校訂に就て述べ、第十章は訓法の研究として、古事記の訓讀に就ては尙ほ今後の研究闡明を俟つものが頗る多いこと其の一例に「天津日高は「あまつひこ」と訓むべきではなからうか」と云ふ事を考證してある。本邦古典を研究せんとする士の一讀すべきものである。(菊版二五〇頁、東京大明堂書店發行、價二・五〇圓)

## ●復 聖德太子傳曆 聖德太子奉讚會著

聖德太子傳曆は從來其の撰者ミ撰述年代ミが不明であり且つ後世の注記攙入が少からず加はつてゐるにせられたものであつたが、藤原猶雪氏は偶東京帝國大學購入の書籍中に其の原文を知るに足るべき書入を有する古寫本を發見し夫に依つて本書の復原を企て茲に『佛教研究』に其の結果を發表されたが其後關東地方大震災火災に其古寫本が灰燼に歸したが爲め其の復原本を印行して之を世に示さんとして茲に聖德太子奉讚會の查閱を経て上梓さるゝに至つたものが本書である。初めに復原された傳曆の本文を載せ次に其の考證が記されてゐる。考證は、現流本に引用せられたる古書並に傳曆に引載したる史籍の成立年代を考へて傳曆の其れに及ぶ、大正の震災火災に失はれたる太子傳傍注の史的價值、菅原爲長手寫寬元本の復原ミ現流本との對照、菅家正本ミ現流本並に其過渡期にある古寫四本の本文批評、菅家正本の由來ミ傳曆の編者及其成立年時、の五項に分ちて之を論じ、今後有力なる

積極的證左の舉らぬ限り菅家本を以て正本ミ信じ其の識語に現はれたる藤原兼輔を以て傳曆の撰者とし、其の撰述年時を延喜十七年九月ミ定めるミ説かれてゐる。傳曆は史的價值に乏しいものであるけれども之を復原し且つ撰者及び撰時につき論究されてゐるのは學界に寄與するところが鮮くない。(菊版一六五頁、聖德太子奉讚會發行、價一・五〇)(以上松野)

## ●船 舶 史 考

文學博士 新村 出著

言語學者である著者が近年世に著した船舶の名稱に関する論文三篇を集めてこれに増補を加へたもの。一、船の丸號、二、八幡船考、三、蘭船エラスムス丸ミ貨狄舟第一篇に於ては船の丸號が應永一一、五、二五附足利義持の御教書を初見ミすること、中古より器物を人格化し愛用の意味を含めて丸ミ稱する風起りし事船舶の丸號もその一例なることを説き第二篇は八幡の意義につき諸説をあげて研究し最後の篇は近來有名ミなれる足利在龍江